博士学位請求論文概要書

近世遊里文藝の研究　―近世中期から明治期にかけて―

長田和也

本博士学位請求論文は、近世中期から明治期にかけての遊里を扱った文藝作品を個別具体的に論じ、個々の論を作品の成立・流布した年代順に配列したものである。

本博士学位請求論文は全三部と、附論二章からなる。それに先立つ序論において、これまでの遊里文学の評価のされ方に注目して先行研究を概観し、それを踏まえてこんにち遊里文藝という枠組みを設けることの意義を論じた。近世の文藝では幅広い分野において遊里が描写されている。かつての近世文学研究において遊里を舞台にした作品は抑圧された人間性の発露としての庶民文藝として評価されていた。その背景には近代主義的な文学観があったことが指摘出来るだろう。しかし、こんにちにおいては過度に遊里を美化することなく、かつてとは別の視点で遊里を題材とした作品を評価する必要があろう。本博士学位請求論文では遊里を文藝の趣向として捉え、虚構における遊里の描かれ方から作者の意図や時代の風潮を読み取ることを試みた。その際、近代的なジャンル意識では読本や合巻として区分けされる作品群を並行して扱った。それらの文藝様式に共有される趣向として遊里を位置付けたためである。また近世文学研究において雅俗意識を問題にすることは常識ではあるが、雅文藝たる漢詩文の中にも遊里を扱った作品は見出すことが出来る。そのため遊里文藝という枠組みで作品を論ずることで、雅俗両方の文藝を扱ってその共通点を見出すことをも可能となるのである。

第一部「洒落本を読む」は、洒落本の作品論全二章からなる。洒落本は説明を省略し、具体的な描写のみを読者に読み取らせることがままある文藝である。現代の読者の一人として作品を解釈しつつも、可能な限り同時代的な読みに近付くことを意識した。

第一章『『遊子方言』再考」では洒落本の定型を確立した『遊子方言』（明和七年頃刊）を扱う。本章ではまず先行研究を踏まえつつ『遊子方言』に至るまでの洒落本史を概観した。続けて、作品の読みに関わる要素として登場人物の身分について論じた。同作の主要登場人物の通り者とむすこの身分については作中で明言されてはおらず、武士とみなす先行研究がある。しかし本章では武士説を裏付ける服装描写と住所に関する記述を再検討し、読者が武士であることを確信する程の情報ではないことを指摘する。一方で二人が一本差しであることに注目して町人とみなすことも可能であると主張する。登場人物の身分は読者の読みに委ねられており、身近な人物を重ね合わせる等、各々が自由に作品を読み進めることが可能な点に『遊子方言』が後代まで読み継がれた普遍性を見出した。実際、寛政から享和にかけて旧作洒落本を後刷販売する板元のあったことが先行研究で指摘されている。同時にその頃の読者の読みは刊行当時とは異なる「誤読」であったことも推測されて

いる。だが本章で提示した読みは後刷本の読者であれば十分に犯しうる「誤読」であり、現代の我々から見れば江戸人の読みの一つと認められるものと考えている。

第二章『『甲駅新話』における宿場女郎の手管」は、新宿を舞台とした洒落本『甲駅新話』（安永四年刊）を扱う。同作は従来、『遊子方言』によって確立した洒落本の型を踏襲して半可通が振られてうぶな息子株が女郎にもてる展開の作品であるとみなされていた。しかしこの「うぶな息子株」と「女郎にもてる」という点について、本章では作中の描写を根拠に否定した。『甲駅新話』における息子株の役割を担う客、金七は茶屋の後家や相方女郎とのやりとりを観察すれば遊び慣れた客であることがうかがえる。一方、当時の新宿では一人の女郎が複数の客を別々の部屋に通して同時に接客する「廻し」と呼ばれる風習があった。この風習は後代には吉原でも行われるようになるが、本章では新宿を舞台とした洒落本や漢詩で「廻し」が描写されている例を示して、地方色を出すために常套的に用いられる方法であったことを述べた。その上で『甲駅新話』における金七の相方、三沢が手水に立ったことに注目すると、他の客のもとへ行ったことを作者が暗示しているように読むことが可能となる。本章では『甲駅新話』について、一見すると『遊子方言』と同じ筋の作品と思わせつつも、新宿特有の風習を踏まえることによって女郎の手管を読み取る楽しみを読者が享受しうる作品であると評した。

第二部「吉原のいにしえ」は全五章からなり、近世前期の吉原に関する考証的関心と、その結果として著された作品について論じた。近世中期以降、古物愛好や考証趣味が流行したが、吉原と芝居の古物を持ち寄る仲間内の集会、雲茶会が開かれ、そこに山東京伝、京山兄弟や大田南畝等が参加したことや、柳亭種彦や曲亭馬琴の協力を得て中村仏庵が吉原考証を著していたことは既に知られている。近世後期においては過去の遊里も考証の対象となっており、そうした知識を散りばめた作品も執筆されていたのである。第一部が同時代の遊里を作中で描写していたことと対照的な現象であるといえよう。

第一章「早稲田大学図書館蔵『吉原恋の道引画巻』について」は、早稲田大学図書館の所蔵する『吉原恋の道引画巻』を扱う。同作は菱川師宣の絵入り板本『吉原恋の道引』と類似する画面構成であり、上段には板本とほぼ同文の詞書が記される。『吉原恋の道引画巻』に写されている「延宝六年清明日」の年記が板本『吉原恋の道引』の刊年に由来するものであることや、吉原風俗を描いた菱川師宣の肉筆画の中に『吉原恋の道引』と同様の詞書を有するものがないことから、この絵巻の淵源を辿ると板本に達することを指摘した。また、識語からこの絵巻が過去の吉原を描いた資料として受容されていたことが読み取れる

と共に、その識語を書いた旧蔵者の星野六蔵が山岡浚明や伊勢貞丈といった考証家として名高い和学者に関係する書物を蔵していたことを指摘した。和学の範疇としての考証と吉原の古物愛好趣味とが一人の武士の中で共存していた一例とする。

第二章「『異本洞房語園』の諸本と式亭三馬」では、吉原の考証資料として広く知られる『異本洞房語園』の諸本を調査して得られた見解を示した。江戸座の俳人徒流が天明頃に増補改題したと目されてきた同書だが、従来注目されていなかった徒流による享和二年の序跋を有する諸本の存在に注目して、増補改題時期の下限を享和二年へと訂正した。『異本洞房語園』を扱うに当たっては、既に失われた原態にさかのぼるよりも遺された諸本を受容史的に分析することが重要と考える。本章では一例として式亭三馬を扱った。三馬の書き入れがある『異本洞房語園』は翻刻紹介されているものの、その翻刻には底本が明記されておらず、三馬旧蔵本の所在は現在では不明。筆者が調査した諸本のうち三馬の書き入れ内容を有する本は三点だが、いずれも三馬自筆ではないことを三馬の筆跡との比較等によって実証した。しかし自筆ではないながらも翻刻本の誤りを修正する点で資料的価値のあることを本章では主張する。続けて書き入れをも含めて三馬が自身の合巻に『異本洞房語園』を利用していること本章で例示した。ただし三馬ははじめから自作に利用することを第一の目的として『異本洞房語園』を所持し、書き入れを施していたわけではないというのが筆者の考えである。

第三章「『契情畸人伝』の典拠をめぐる一考察」は、前章から続けて三馬の合巻『契情畸人伝』（文化十四年刊）における『異本洞房語園』利用について論ずる。『契情畸人伝』に『異本洞房語園』及び読本『烟花清談』（安永五年刊）が利用されていることは従来指摘されていたが、本章では各話ごとに具体的に利用している話を指摘した。加えて三馬が『金神長五郎忠孝話』（文化六年刊）でも『異本洞房語園』に載る漢詩や女郎の伝説を利用しており、それらを『契情畸人伝』で再び使用したことも指摘した。また、前章と同じく三馬は『異本洞房語園』へ施した書き入れをも『契情畸人伝』に利用していた。『契情畸人伝』はこれらの典拠に大幅に依った作品ではある。しかし典拠となる複数の話を繋ぎ合わせる三馬なりの工夫も見出すことが出来、そこから詩文を解する教養を有することを名妓の条件の一つとして三馬が認めていたことがうかがえるのである。

第四章「『紅葉塚』の方法」では為永春水の中本『紅葉塚』（文政十年刊）を扱う。中本には現代のジャンル意識では厳密に内容を区分け出来ない過渡的な作品が多いことが既に指摘されており、『紅葉塚』にもその傾向が見られる。本章では同書が中国白話小説の翻訳

『通俗金翹伝』や、春水も師事していた振鷺亭の中本『風俗本朝別女伝』（寛政十年刊）、田にし金魚の洒落本『契情買虎之巻』（安永七年刊）を利用していることを指摘した。次に、本章では口絵において其角の句が本編と関連づけて引用されていることを論じた。また『紅葉塚』は近世前期の吉原女郎、高尾を題材としているが、春水が『花街漫録』（文政八年刊）に載る高尾の筆跡を口絵に利用していることや、作中における高尾の墓の描写が『異本洞房語園』に拠っている可能性のあることを論じた。其角や高尾といった当時既に考証の対象となっていた近世前期の人物を取り上げることで読者の興味を惹こうとした春水の手法を明らかにした。次章でも論ずるが、『紅葉塚』は『絵本高尾外伝』へと改題、半紙本に姿を変えて出板されて明治に至るまで読み継がれた作品であり、名妓高尾を扱った作品への関心が長く続いていたことを示している。

第五章「『紅葉塚』から『絵本高尾外伝』へ」は、『紅葉塚』の板本を利用して新たに半紙本『絵本高尾外伝』が出板されたことについて、架蔵の初印本等を書誌的に検討した。初印本の見返しと奥付から『絵本高尾外伝』が天保十五年に江戸の丁子屋平兵衛から出板されたことを明らかにした。さらに後印本の奥付から同書が弘化五年以降には大坂の河内屋平七から売り出されており、更に明治期まで引き続き大坂の河内屋系の本屋から売り出されていたことも指摘した。こうした書物が長く流通していたことは、高尾等の吉原の事物についての考証的な興味が継続していたことを示していよう。また『紅葉塚』と比較した際に本文が不自然に前後する箇所があることから、開板に当たって『紅葉塚』の板本を切り貼りして板下を制作したと仮定した。中本を利用して半紙本を開板した特殊な事例であるといえよう。『紅葉塚』を半紙本の『絵本高尾外伝』として板木を新たに刻して販売したのは、上方の読者が半紙本を好むことや天保の改革における中本型の人情本弾圧を意識したものと思われる。

第三部「理想化される遊女」では、近世後期の上方読本『艶廓通覧』と明治の漢文小説『近世佳人伝』を論じた。両作は共に作者の理想を女郎に投影しているが、時代と文藝様式が異なる作品の間に共通点を見出すことも意識している。

第一章「『艶廓通覧』における先行作からの影響と『傾城畸人伝』への改題について」は、寛政十二年に大坂で刊行された読本『艶廓通覧』の諸本を調査し、『傾城畸人伝』へと改題されて明治期まで読み継がれてきたことを明らかにした。『傾城畸人伝』はその成立年が目録によって文化十三年、あるいは嘉永四年とされている。これらの成立年説の根拠となった奥付を有する諸本を整理し、板木改刻の実態も明らかにした。『艶廓通覧』（『傾城畸人伝』）

は都賀庭鐘『英草紙』（寛延二年刊）等の先行作を利用し、女郎が間夫のために奔走する様子を肯定的に描くと共に、客も女郎に誠実に接するべきだと主張している。こうした女郎のまことを讃える作風は、江戸においては梅暮里谷峨『傾城買二筋道』（寛政十年刊）に確認出来、東西問わず時代の流行であったことがうかがえる。一方で、後印本には本文と無関係な教訓書『和論語』の抜き書きが付されていることから、明治においては遊興を戒める教訓的な読み物としても受容されていた可能性を指摘した。

第二章から第四章は蒲生重章の漢文伝記小説『近世佳人伝』（明治十二年初編刊）を扱う。蒲生重章は天保四年に越後で生まれ、医業の傍ら詩人を志して江戸に出て勤王志士と交わった。維新後の明治八年には太政官正院修史局に登用され、この時の経験を踏まえて後年に漢文伝記集『近世偉人伝』（明治十年初編刊）を著した人物である。

第二章「蒲生重章「四時詞倣蘇東坡」考」は同作二編上（明治十四年刊）の題詞「四時詞倣蘇東坡」を読解した。同詩は題名から北宋、蘇軾の「四時詞」に倣った作であることが分かるが、重章がそれ以前から蘇軾の「漁夫四首」に倣った連作「漁父歌四首。蘇子瞻に仿ふ」を詠じていたことをまず指摘して、青年期の重章が蘇軾詩に親しんでいたことを明らかにした。重章の「四時詞」は蘇軾に依韻した詩であるが、作中には日本の吉原の風俗風習も詠み込まれていることを指摘した。こうした詩が作られた背景として明治期における竹枝詞や香奩体の流行が関連付けられよう。

第三章「『近世佳人伝』における漢詩」では、『近世佳人伝』における漢詩の効果について論じた。『近世佳人伝』を著した重章に、かつての女郎達が有していた教養を称賛する意識のあったことは先行研究において指摘されている。しかし作中に引用されている女郎を讃える漢詩についての言及はこれまでなかった。本章ではまず重章の詩集『裴亭詩鈔』（明治三十五年刊）から、古詩を尊重する重章の詩観を明らかにした。ついで『近世佳人伝』において梁川星巌や鈴木松塘の詩が引用される箇所に目を向けた。星巌が京都の藝者、小絹を愛して共に山水に遊んだことを風流と評していることから、重章自身が女郎や藝者を交えての風流韻事を詩人としての嗜みとして捉えていたと分析した。また、詩文を解する女郎、豊岡に重章が贈った二十句の七言古詩を扱い、才藝に秀でた女郎を称賛する重章の意思を読み取った。

第四章「『近世佳人伝』「花扇伝」の典拠と梁川星巌」では、『近世佳人伝』初編下の「花扇伝」において、重章が『北里見聞録』（文化四年序）に載る近世の女郎、花扇の伝記を漢文化し、さらに客として梁川星巌を登場させていることを指摘した。重章による脚色は星

巌が青年期に遊興に耽っていた逸聞を踏まえている。「花扇伝」成立の背景として、重章自身が若かりし頃女郎に助けられた経験があったことと、明治十年代における人情本の再評価や漢文小説の流行とが挙げられる。『近世佳人伝』は近世の女郎から規範となる徳を見出そうとしているが、これは同時代の依田学海の「高尾伝」（『談叢』巻二、明治三十三年刊）にも共通する意識であり、明治期における遊里憧憬を考える上で重要な作品であるといえる。

終論では全三部の各章を振り返った。近世の遊里文藝が遊里という実際に存在した空間を題材に虚構の世界を構築し、その虚構を通じて作者の理想や読者の好みが表現されていることを指摘しつつ、作品間に見られる共通点を指摘した。例えば第三部第二章から第四章で扱った『近世佳人伝』は詩文による客と女郎との交流も描かれるが、詩文を解する女郎の教養を讃える意識は俗文藝たる合巻『契情畸人伝』を執筆した三馬からも見出せるのである。

附論一「大東急記念文庫蔵『清人賞辞文』について」は大東急記念文庫蔵の写本『清人賞辞文』の本文成立時期について従来の説を訂正すると共に、その内容を分析した。同書は長崎にいた清人による市川団十郎を題材とした漢詩文を載せた書物である。従来この団十郎は七代目とされていたが、烏亭焉馬の『花江都歌舞妓年代記』（文化八年刊）の記事等に拠って二代目へと訂正した。詩については、清人たちは実際の団十郎や歌舞伎をよく知らず、中国における宴席の様子を詠じ、藝能で知られた人物の故事を詠み込んだ作であると分析した。なお、利用している故事の中には中国唐代の名妓、念奴も含まれる。

附論二「明治大学図書館蔵『客衆肝照子』の書き入れ」は、明治大学図書館蔵の山東京伝の洒落本『客衆肝照子』（天明六年刊）に施された書き入れを紹介した。同書には京伝によって著された各種人物の台詞に続ける形で台詞が書き入れられている。こうした書き入れは作品の読解を助ける注釈的なものではないものの、往時の読者が作者の気分になって洒落本を読んでいたことを示すものであり、洒落本をいかにして楽しんでいたかがうかがえる書き入れであるといえる。

以上が本博士学位請求論文の概要である。終論でも述べたことだが、遊里文藝という枠組みの中で時代や雅俗の文藝様式の垣根を越えて作品を比較し、共有している創作手法や価値観を見出すことにおいて一定の成果を得たと考える。